

Title	幼児はいかに問題を解決するのか：類推による問題解決能力の発達 [ 学位論文内容の要旨/学位論文審査の要旨/日本語要旨/外国語要旨 ] ( 学位論文内容の要旨 )
Author(s)	大塚, 紫乃
Citation	
Issue Date	2017-03-23
URL	<a href="http://hdl.handle.net/10083/61347">http://hdl.handle.net/10083/61347</a>
Rights	
Resource Type	Thesis or Dissertation
Resource Version	publisher
Additional Information	There are other files related to this item in TeaPot. Check the above URL.

This document is downloaded at: 2018-03-17T06:26:46Z



Ochanomizu University

## 学位論文内容の要旨

学位申請者	大塚 紫乃【論文博士】 【人間発達科学専攻 平成23年度生】 (平成26年3月31日 単位修得退学)	要 旨
論文題目	幼児はいかに問題を解決するのか —類推による問題解決能力の発達—	<p>先行研究で、因果構造に基づくある一定の類推が5歳を過ぎると可能になることが示唆されているが、幼児期後期の間に、どのように類推による問題解決能力が発達していくのか、その詳細は明らかになっていないため、それを調べることを本研究の目的としている。また、従来、問題解決の際に、問題構造の抽出と構造に基づく解決ばかりに焦点があてられてきたが、対象の属性に注意が向けられやすい幼児においては、直接、構造に注意を向けさせるのは難しく、構造の抽出につながりやすい対象の属性に注意を向けさせる手法が有効なのではないかと考え、その点の検討も本研究の目的としている。</p> <p>具体的には、複数の道具と類似の道具を使って解決を行う物語文を材料に、4歳から6歳の子ども（4歳半～5歳半未満、5歳半～6歳半未満）を対象に、どのように類推を行っているのか、成人の類推とはどう異なるのか、また、どのような教示が行われると、より本質的な問題の理解へと促されるのか等を、提示する物語数の操作、成人との比較、教示の操作を行う6つの実験により検討している。その結果、5歳後半以降は構造につながりやすい対象の属性に自発的に着目しやすくなっており、それが問題解決につながりやすくなっていること、5歳前半でも構造につながる属性に注目しやすい教示を行うことが有効な可能性が示された。</p> <p>本研究により、属性へ注意を向けやすいという幼児ならではの特徴に基づく、幼児の問題解決のあり方や、その特徴を生かした、問題解決を促しうる手法が示唆された。幼児期の問題解決能力の発達過程の詳細を把握し、児童を含む子どもの問題解決や学習の支援法を提唱していくにあたっての今後の課題として、多様な課題による検討と対象者の年齢幅を広げ検討を行っていく必要性があることが述べられた。</p>
審査委員	(主査) 准教授 上原 泉	
	教授 石口 彰	
	教授 坂元 章	
	教授 菅原 ますみ	
	教授 浜野 隆	